

言葉の採集にみる『幼児の世界』 ③

佐藤 五十五

The World of Children and their Expressions ③

Isogo Sato

本稿は幼稚園教育実習で実習生が幼児との対応の中で採集した「幼児の言葉」を分類整理し考察を加えていこうとするものである。考察のねらいは造形的、感覚的な視点から子供の遊びのきっかけと展開の糸口を同時に見出していくことにある。前号で(1)「落ち葉」に関連する言葉の考察を終えた。本号では(2)「砂場遊び」に関する幼児の様々な言葉を対象にして造形的、感覚的な視点を基に考察を展開することになった。「砂場遊び」として採集された言葉は次のような項目①【アースワーク遊び】②【レストランごっこ】③【砂と石】④【粘土で作る】に分類することができた。本号では①②の項目についての言葉を取り上げ、考察を加えてみた。(考察対象として例に挙げた言葉は多数が採録したものについては☆印を、また数名に限られたものについては採録者の学生番号を付して採録データとした。また資料整理の手落ちから採録者が不明のものも幼児の受け止めとして如実なものは省き難く敢えて考察対象とした。*印)

1. 『心情』

(1) 落ち葉

- | | | |
|-----------|---|----------------------------|
| ①【判断基準】 | } | 清泉女学院短期大学研究紀要 第13号(1995)掲載 |
| ②【色彩と発想】 | | |
| ③【生と死】 | | |
| ④【形の発見】 | } | 清泉女学院短期大学研究紀要 第14号(1996)掲載 |
| ⑤【落ち葉と遊び】 | | |

(2) 砂場遊び

※砂場遊びという規定を所謂「砂場」と云う特定された場所のみの遊びに限ってしまうと「砂場」を離れた砂遊び、土遊び、泥遊びは分類上行き場を失う。遊びの素材としての砂や砂の混じった土は「砂場」に限らずにあちこちに存在している。また小石や、粘土質の

土等での遊びも「砂場」を離れた遊びである。幼児の身近な素材と云う事では共に関連性のある物なので、砂場遊びの延長線上の遊びとして一緒に考えていきたい。同時に「粘土」と云う事で、室内での「粘土遊び」に関してもその線をつなげてみた。砂場は幼稚園の設置基準の一項にもなっているだけに遊びと環

境という点では、その具体的遊びの場面を十分に知る必要がある。前回までの落ち葉は、自然の季節的な産物と云う事で実に多様な子供達の言葉があり、落ち葉を身近な素材として遊ぶ具体的な場面を考察することができた。その点「砂場」はセットされた舎外の舞台という感があるが、砂そのものは具体的な自然物そのもので、冒頭に触れたように砂場の境界はいつの間にやら有って無きが如きものと

なる。その境界を無視して越える事が遊びの集中であり発展であろう。遊びの舞台は子供達にとって際限がない。砂場遊びに関する言葉は次の様な項目にまとめて分類することができた。

- ①【アースワーク遊び】
- ②【レストランごっこ】
- ③【砂と石】
- ④【粘土で作る】

①【アースワーク遊び】 83例

《先生、川作った砂で 山ができるよ 12例》

- 1.どのくらい 大きくなるかね、楽しいね。 ('92-69)
- 2.お山 作るのって 楽しいよね。 ('94-20)
- 3.ねえ、土を 強く固めると 頭みたい。 ('92-80)
- 4.これ 砂糖の 大きな 山にしよう。 ('94-34)
- 5.富士山みたいな お山作ろうね。 ('94-38)
- 6.お山っていうのはね、上が とんがって いるんだよ。 ('92-67)
- 7.先生、川作った砂で 山ができるよ。 ('92-78)
- 8.この山は 大きいから 富士山だ。 ☆
- 9.こわされないかな。(砂場で作った山) ('93-85)
- 10.この山 こわすの もったいないね。 ('92-78)
- 11.お山 壊したくない。 ('94-27)

※砂場が子供たちを引き付ける何よりの要因は、砂の持つ感触である。小さな砂粒の一つ一つが柔らかに肌に触れる感触は、安心感と安らぎを伴って受け止められる。砂の中に手を入れてじっとしていたり、砂の表面を軽く撫でたり、砂を掬ってサラサラとこぼしたり、こぼれ落ちる砂を別の手で受けたり、裸足の足が手に代わって同様に砂との関わりを続けたり・・・こうした場面は幼児一人の絶対世界であり、砂との単純な関わり(行為)が繰り返され、肌の触感を楽しんでいるといっ

てよいであろう。砂場遊びの原点はここにある。ダイナミックなアースワークの展開も砂が好きになれなければ始まらない。一人一人の幼児が思い思いに砂と戯れる事の環境を整えることが保育者の大事な役割である。いつの間にかやら子供たちは砂と大の仲良しになって、色々な道具を使って砂と戯れるようになる。スコップで砂を掬ったり、空容器やパイプに砂を詰めたり空けたり、ふるいでふるったりとまるで砂の性質検査である。砂場の環境を整えるという事は、子供たちの実態に合

わせてこうした小道具をそれとなく準備し砂場の環境としておく事である。年がら年中砂場にスコップではなくて、子供たちの実態に合わせて小道具が出入りする事が環境設定と云われる由縁である。幼児一人一人の砂との戯れは間もなく数人のグループでの目標を持った遊びに変わっていく。山という形の発見に端を発しての遊びである。掬った砂を一ヶ所に次から次と落としていくと、きれいな円錐形ができる。しかし、なかなか高い山には

ならない。裾が広がるばかりである。「川作った砂で、山ができるよ」の一言は、乾いた砂と湿った砂との違いの発見であり、大きな山という規模の違いとなって子供たちに理解される。目標を持って互いに協力して十分な満足感を味わうと、その後に思いも寄らない心情が生まれてくる。砂山そのものに対して「壊されないかな」と言う思い入れである。手をかけて作ったものを大切にす気持ちをも、幼児はこんな場面でも獲得しているのである。

《先生、僕の掘ったトンネルだよ 9例》

- 1.お山の 隣に、深い温泉を 作ろうよ。 ('94-76)
- 2.ここは 山だから その中にトンネルを 作ったんだよ。 ('94-25)
- 3.トンネルの上は 橋なんだよ。 ('94-106)
- 4.先生、僕の掘った トンネルだよ。 ('94-93)
- 5.あんまり 山に 登ったらだめ、崩れちゃう。 *
- 6.お砂の山に 穴をあけると 洞窟みたい。 ('92-51)
- 7.このトンネルには、秘密の物 隠すの。特別に 先生だけ教えてあげるね。 ('93-123)
- 8.ほら見てよ トンネルが つながったよ。手を入れてみてよ。 ('93-115)
- 9.トンネルの中に 何かいるぞ。 *

※サラサラと流れるような砂の気持ちよさとは別に、水を吸った砂のおもしろさはどうであろうか。一つ一つの砂の粒子が手を結んで様々な造形を見せてくれる。幼児の造形活動の素材として砂は欠かす事のできないものであろう。前項で目標を持った遊びとしてのグループでの山作りを考察したが、幼児の遊びにおける目標は、遊びのスタートにこそなれ決して遊びの終了を意味してはいない。「この山、こわすのもったいないね」の一言は、やむを得ず遊びを中断された状況をも語っている。山ができたなら目標達成で「はい、お片付けしましょう。ひよこ組さんのために砂場

も平らにしておきましょう。」等の几帳面な先生の子想までしてしまいそうである。砂場の幼児の遊びは変幻自在、グループになったり一人で楽しんだり様々で、目標の山ができれば、それが次の遊びのきっかけとなる。山ができればお決まりのトンネル作りである。あるいはトンネル作りのために山を作ると言ってもよいであろう。山作りだけで遊びが終わる事は少ない。「お山の隣に、深い温泉を作ろうよ」「穴をあけると洞窟みたい」等、できた山をきっかけとして別の発想が生まれてくる。山は無傷のままということはない。時には崩れてしまって喧騒な場面も展開しよう。

そのことは新しい工夫と注意深さを呼び、更に堅固な山とトンネルができ上がることであろう。トンネルは電車や車が通る通路である。トンネルを掘ることの楽しさと、その通路を使って遊ぶことの楽しさは互いに遊びの目標でありきっかけでもある。トンネル作りも手で掘るだけでなくスコップや空容器など小道具が必要であろう。塩化ビニールのパイプなどがあれば、その上に砂を乗せていだけで

トンネルができ上がる。これも初めからそれがあればいいというものではない。手で掘るトンネル作りが一段落した頃、長短色々な塩化ビニールのパイプが用意できたらどうであろうか。手作業のトンネル掘りから合理的なトンネル工事遊びへの発展のきっかけになりそうである。砂場の環境設定として幼児の遊びの実態を把握していないと余計な物があふれるばかりの砂場になってしまう。

《お山に 雪が 降りました 12例》

1. あっ、冬になった。(山に白い砂をかけて) ('94-66)
2. お砂の 雨だ。(砂をパラパラ落として) ('94-14)
3. お山に 雪が 降りました。 ('92-66)
4. お山の上には 白い砂を かけるんだよ。 ('94-126)
5. お花の お山ができたよ。 ('93-63)
6. 白い砂はね お山にかけると きれいだよ。 ('92-11)
7. この山 雪 降ってるみたいでしょう。 ('93-65)
8. 雨が 降ってます、今度は 雪です。 *
9. 山に この砂をかけると、富士山みたい。 ('92-6)
10. 冬の お山に変わった。 ('93-48)
11. 白いお砂 雪みたいだね。 ('92-67、132)
12. 富士山っていうのは、上が白くて、下が黒いんだよ。 ('92-67)

※湿った砂をかき集め、寄せ集めして掌やスコップの背で軽く叩いて固め裾野の広い山が段々できて来るのは楽しい造形活動である。グループで隣り合っの山作りは、高さ比べや大きさ比べもあって、色々な工夫も生まれてこよう。さて山作りはどこで終わるのであろうか。幼児の造形は形の完成で事足れたりと言う事はない。ましてや砂場の造形である、次々と発想、見立てをしていく事が遊びであると考えるとよいであろう。「この砂、雪なんだよ」と言う見立ては山に雪を降らせる遊びに

発展し、砂のパラパラ落ちる様子は別の幼児には雨が降っているように見える。「雨が降ってます、今度は雪です」と言う説明の言葉は見立ての多様さを示していよう。自由な発想と見立ては、何よりも大切にしていかななくてはならない。それを聞き取ってやるのが保育者の役割でもある。グループ活動の場面では、生かされない発想や見立てもあろう。それ故にこそ保育者の受け止めが必要になり、別の機会にその事の実現を図っていく事ができよう。遊びの多くはパターン化され、いつでも

自由な創造性にあふれた活動と云うわけには行かない。この山作りにしても「お山の上には、白い砂をかけるんだよ」「富士山っていうのは、上が白くて、下が黒いんだよ」と一連のパターンのある事がわかる。そのパターンを壊してくれるものは、砂場の新しい環境設定である。「お花の お山ができたよ」は、その一例で、砂場近くで咲き誇る満開の雪柳の花を採ってきて山全体に差して見立てたものである。勿論、このお花の山作りもパターン

化する事にはなるのだが、「お山の上には、白い砂をかけるんだよ」と云う遊びのパターンでしか遊べない幼児にとっては新しい遊びの経験になるであろう。ちなみに山の見立てを子供たちも知っている身近な近辺の山や、お泊まり保育で出かけた高原の名前で保育者がそれとなく見立ててみたらどうであろうか。砂場で保育者も一緒にと云う場面で、パターンを壊して行く助言を見つけたいものである。

《先生、猫の形の 池があるよ。 11例》

- 1.お水が 砂の中に 隠れちゃった。 ('94-102)
- 2.先生、この砂ね 水を吸うんだよ。 ('94-4)
- 3.砂が 水を飲んでいる。 ('92-6)
- 4.先生、水に 砂をいれると 無くなっちゃうんだよ。 ('94-10)
- 5.先生、ありさんが 水たまりで おぼれている。 ('94-53)
- 6.お水 冷たくて 気持ちいいよ。 ('94-39)
- 7.先生、温泉できたよ。温泉 あたたかいよ。 ('94-29)
- 8.かえるの お風呂作るから お水くんできて。 ('94-117)
- 9.お水屋さんです。欲しい人は 1億円です。 ('93-80)
- 10.お池が いっぱいできているよ。 ('92-86)
- 11.先生、猫の形の 池があるよ。 ('92-64)

※雨降りの後の砂場は、いつもとは様子が違う。十分に水を含んで黒く固い。乾いて白くてサラサラという感じとはまるで反対である。湿った砂の造形素材としての有効性については既に述べたが、雨後のこうした機会を十分に生かすことを忘れてはなるまい。もっとも、バケツで水を運んでジョウロで砂場に水を撒くという遊びも捨てたものではない。そのことで色々な場面が展開する。「先生、この砂ね、水を吸うんだよ」新しい発見である。ジョウロどころかバケツの水をそっくり空けて

も「お水が砂の中に隠れちゃった」と云う事が起きる。驚きでもあるが幼児にとっては「砂が水を飲んでいる」と云う擬人化された受け止めが生まれてくる。こんな言葉がきっかけになって、あちこちに色々な口ができはしまいか。人の口、動物の口、花の口、ロボットの口……。こうした展開の可能性は「砂が水を飲んでいる」と云う幼児の何気ない言葉を一緒にいる保育者が、どの様に受け止めてやるかにかかっている。水を運ぶと云うのは一見無駄な行為である。運ばされたら、それ

は労役に近い。子供たちの人間関係は十分に観察している必要がある。まま、運ばされ役が決まっていたりする。「お水屋さんです。欲しい人は1億円です」となればおあいこであるが……。砂が水を吸う一方、大雨の後には園庭のあちこちに水溜りができる。この水溜りは子供たちにとってはことの外興味の湧く対象である。どうしても手を入れ、足を入れたいくなる。砂場とは違ってここでの発想や見立てはまた別の様相を見せる。この水溜りを前にして色々なやり取りがある。「ありさんが水たまりでおぼれている」等の場面に出会うこともあり、ありさんを助ける方法から橋や船を作って遊ぶ関わりも生まれてこよう。

天気の回復に従って水溜りの数は少なくなつて、手を入れると水は温かくなっている。お風呂の見立てがすぐに飛び出してくる。「温泉できたよ。温泉 あたたかいよ」手や足を入れて水との違いの比較検討である。これも水溜りができてこそその経験であり、発想である。「先生、猫の形の池があるよ」という発見にはどのように対応したら良いのであろうか。(後述) 庭には大小様々の「お池がいっぱいできている」のである。余りにも水はけの良い庭には、この興味ある水溜りはできないし子供たちの遊びも生まれにくい。良く管理整備された環境は、得てして子供を遠ざける結果を生みやすい。

《もっと深く掘らないと 水が流れないんだよ 16例》

- 1.ここに 水 入れたら 川になっちゃた。 ('92-79)
- 2.ここに 川を 作るんでしょう?水 くんできくるね。 ('94-100)
- 3.この川 もっと 大きくなれば 海みたいだね。 ('94-82)
- 4.こんなに 大きな 川が できたよ。 ('94-111)
- 5.もっと深く 掘らないと 水が 流れないんだよ。 ('94-92)
- 6.この川は 海に つながっているんだよ。 ('93-32)
- 7.この川 もっと広くなれば 海みたいだね。 ('93-82)
- 8.みんなで 作ると ーんな 大っきな川が できるね。 ('92-72)
- 9.川だ。川が できた。(砂場に水を流して) *
- 10.先生、長い川が できたよ。 ('94-71)
- 11.僕 こんな大きな ダムを 作ったよ。 ('92-76)
- 12.先生、このダム 僕が 作ったんだよ。 ('94-81)
- 13.先生、これはダムで 水を ためておく ところだよ。 ('94-120)
- 14.先生、これは川で ここは ダムだよ。 ('94-130)
- 15.ここから 水を 流せば ダムになるよ。 ('93-103)
- 16.ダムを 造ったよ 見て。 *

※砂場と水の関係は既に触れたように、新たな遊びの展開を見せてくれる。溜っている水

に対して流れていく水は川である。「ここに水入れたら川になっちゃた」と云うきっかけは

偶発的な場面に対しての見立てで、前述のお風呂や池作りの際、堤を乗り越えた水は低い方へ、低い方へと流れ下る。このような高低のある、しかも下りだけの溝作りを川作りと呼ぶ。溝ができるまでがなかなか楽しい。真っ直ぐではなく途中で蛇行したり、二つに分かれたり、橋が架かったり、ダムが出来たり水の流れをあれこれと予想して何人かが関われる。「この川は海につながっているんだよ」等と云う予想も出てくる。「もっと深く掘らないと水が流れないんだよ」と云う川作りの工夫は予想に反して、なかなか流れない川の経験が元になっている。溝が出来上がると待ちに待った水の流し込みである。枯れ山水と云うわけには行かない。特にダム作りの水の量は大変なものである。それでも「僕が水汲んでくる」「僕も手伝うよ」（態度の項、後述）と云う様に取り組んでいる遊びの盛り上がり方で一向苦にはならない。小さなバケ

ツでは二度三度では役に立たない。みんなで交代に運ばなくてはならない。バケツの水を流した時だけが川である。なかなか水量が難しい。堤は決壊し、大慌てで修復しなければならない。この事が楽しくてダム作りの遊びがある。大量に貯めた水が一気に流れ下る場面は爽快である。流れの川筋がわかると色々手直しをして再びダムにして水を貯める事になる。長い川は出来たが、水は長く流れない。もっともっと水が必要である。砂場全体を水浸しにして漸く長い水溜りが出来る。川遊びの終わりである。しかし「この川もっと広くなれば海みたいだね」は、また次の遊びへのきっかけとなり、川筋を広げて更に水を運ばなくてはならない。この頃子供たちは全身砂まみれ、水浸しと云うことになる。明日は海作りだという期待を持って遊びの終了である。

《この池の中に 金魚さんいるんだよ 14例》

- 1.この池の中に 金魚さん いるんだよ。 ('92-21)
- 2.でも こんなに 深いから これは池だよ。 ('92-79)
- 3.こっちの方が 大きい池だよ。 ('92-78)
- 4.違うよ。湖だよ。だって こんなに 広いもん。 *
- 5.大きな池が できたよ。何て 名前にしようか。 ('93-32)
- 6.見て見て、魚が 釣れたぞ。 *
- 7.船だぁ 魚だぁ。(砂場で落ち葉を使って遊ぶ) ('93-115)
- 8.ここから 落ちちゃうと 海だから 死んじゃうよ。 ('94-94)
- 9.この きれいな石を 洗って、お魚を入れて 海を 作るの。 ('94-75)
- 10.これは (深い) 海なんだ。 ('94-111)
- 11.この葉っぱは ワカメ、これは お魚さん。泳がせよう。 *
- 12.これは 海にしよう。 ('93-131)
- 13.先生、海を 作ったよ。 *
- 14.先生、これ海なの。これが船。(水たまりを大きくして) ('94-34)

※大雨の後、園庭のここかしこに出来た水溜りに対しての興味については既に触れたが、この水溜りについての見立ては「猫の形の池」に見られるように特徴的な形を見立てて遊ぶことができる。大きい池、小さい池、丸い池、長い池等、比較対照することでもっと大きい池や、もっと小さい池の発見と云う比べっこ遊びが展開する。ひょうたん形の池をくびれの所で分けてしまえば小さな池になるし、隣り合った二つの池をつなげれば更に大きな池が生まれる。大きな池は「湖だよ。だって こんなに広いもん」と云う別の呼称に発展する。池や湖、海の判断基準は広さばかりでなく深さをも加えてあれこれと見立てをする事になる。さて土木工事的な見立て遊びばかりに考察の中心が行ってしまっているが、池や海の見立て遊びの楽しさは他にも一杯ある。何よりも水の生き物の見立てが待たれる。「この池の中に 金魚さんいるんだよ」は具体的な物の見立てではなくて、濁って、水の中が見えない事で想像できる発想であろう。落ち葉を使って「船だよ、魚だよ」という見立ては、偶然の発見の場面であろうか。落ち葉は見立

てをするのに都合のいい素材である。魚の形にも船にも見立てることができる。しかし一つでも落ち葉だけでは遊びに活力が生まれない。水に浮いたり、水の中で動く物があったらこの見立ては更に活発になるであろう。発砲スチロールやアルミホイール、ビニールや色紙、割り箸や木片、板等、バケツに入れて、子供たちが池や海に見立てた傍らに置いてみたいものである。スチロパールやアルミのお皿はそのまま船になる。この船には誰を乗せようか、何を乗せようか。釣った魚を乗せたらどうだろう。お皿だからすぐにお店に並べられることも出来る。魚はやはり落ち葉が良い、赤い魚だっている。ビニールの切れ端はクラゲだ。釣ってしまうばかりが遊びではない。「この葉っぱは ワカメ、これはお魚さん、泳がせよう。」泳ぐ姿が見たいものである。深い海にする必要がここにもある。水もきれいでないと具合が悪い。「このきれいな石を洗って、お魚を入れて海を作るの」と云うのは魚が気持ちよく泳ぐ姿が見える、きれいな海を作る事の楽しさを現していよう。

《この穴の中に 小人さんがいるのかな 9例》

- 1.大きく 穴を掘って 温泉を 作ろうよ。 ('94-81)
- 2.ここが 一番深いんだよ。 ('92-11)
- 3.ここね 掘っていくとね 地球の 裏まで 行くんだよ。 ('92-102)
- 4.ここは 地獄だから 落ちたら 死んじゃうんだよ。 ('93-80)
- 5.この穴 恐竜の 巣なんだよ。 ('93-73)
- 6.この穴の中に 小人さんが いるのかな。 ('93-70)
- 7.こんな大きな穴 掘っちゃった。 ('93-63)
- 8.ほら、こんなに 掘れちゃった。 ('93-126)
- 9.わぁ、怪獣の 足跡だ。(大きな穴を見て) ('93-26)

※砂場での穴掘り遊びについては既にトンネル作りで触れているが、トンネルとは違った発想もあるのでここで、それを集めて考察の対象としてみたい。砂をかき集めて山を作る行為は手持ち無沙汰ではっきりとした目的もなく進められることがある。同様に穴掘りも同じ箇所を無目的に掘り下げていくだけの遊びでとして見られることがある。それは砂を掬っては持ち上げて、サラサラとこぼす遊びとほぼ同程度のものと考えることができよう。しかし砂と関わった事の結果が形として残る事は(山が出来たのと同じように)「ほら、こんなに掘れちゃった」と無目的であった行為に対しての意味付けが生まれてくる。こうして掘る事が形を作る事と結びついた行為である事がわかるのは間もなくの事である。掘るという行為が意図的に始まると、乾いた砂の場合と湿った砂の場合、手で掘る場合とスコップやほかの小道具を使った場合とでは結果がおのずと異なる。結果が違えば当然の事ながらその見立ても異なってくる。乾いた砂では穴の規模は限られたもので、掘っても掘っても砂は崩れて深い穴にはならない。しかしそれは蟻地獄の穴を連想させて「ここは地獄だから 落ちたら死んじゃうんだよ」等と云う見立てが生まれてくるから穴掘りは湿った

砂でなくては、と限定する事はない。しかし縦穴を掘ると云う場合、10cmも掘ればだいたい湿った砂になって更に掘り続ける事が出来「こんな大きな穴、掘っちゃった」と云う結果になる。時にはそこに水が溜ってくる事もある。海辺の砂浜で良く経験する事である。そんな事を経験は井戸掘りや「大きく穴を掘って 温泉を作ろうよ」と云う見立てにつながっていく。穴掘りの遊びが単発的な見立てで終わってしまっただけでは土木工事遊びの範囲に過ぎず、遊びのふくらみに欠ける。先にトンネル作りの考察では触れる事が出来なかったが、横穴の魅力は幼児なりにかなりの関心がある。「お砂の山に 穴をあけると洞窟みたい」はトンネルにしないで洞穴遊びとして発展出来、子供の心に広がる世界をかいま見る事ができよう。洞窟の中には何がいるのだろうか、不安と期待と関心が入り混じって興味が募る。「この穴 恐竜の巣なんだよ」と云う発想もその卵作りや「怪獣の足跡だ」につながって、恐竜の住む世界へと子供たちの意識を広げることができよう。また別に「この穴の中に 小人さんがいるのかな」と云う発想も、小人の世界を作ると云う大きなきっかけになる一言であろう。

②【レストランごっこ】103例

《これ食べれないから うそっここで食べるまねして 10例》

1. 今ね レストランごっこ しているの。 ('93-92)
2. これが おそばでね、こっちが おつゆなの。 ('92-110)
3. ご飯でしょう、おみそ汁でしょう、これは お漬物。 ('93-78)
4. たくさん 作りましたから、たくさん 食べて下さい。
5. どう? おいしい? まだまだあるよ。 *
6. 先生 食べて、これがスプーンだよ。 ('94-110)

- 7.これ 本当は 食べれないけれど、食べる まねをしてあげればいいの。 ☆
- 8.これ 食べれないから うそっで 食べるまねして。 ('94-118)
- 9.先生、これね、ラズベリーと ブルーベリーと ええっとフルーツなんだよ。 ('93-77)
- 10.先生 見て、沢山 出来たでしょう。先生も 食べてもいいよ。 *

※レストランごっこは室内でも出来るが、こうした砂場を中心にしたものとはかなり様相が異なる。室内での紙を丸めたり、切ったり、色を塗ったり、貼り合わせたりという遊びに比べると、より現実的な場面が展開する事になる。それは素材の見立て方の違いにも因るが、料理をするのと同じような動作をしなければ物が出来ないからである。「ケーキだよ。ぺたぺたくっついてきて重たいなー」と云う、泥を使ってのお料理はかなり現実味のある場面の展開を示している。それは感覚的な嫌悪や尻込みをも起こさせる。自分の手が汚れる、洋服も汚れる、顔にも汚れが付く、靴がぬれる等々。そうした事で遊びの中に入れない子供達がある。しかし無理をする事はない。遊びの楽しさがわからなければ、それに手を出す事より別の事が苦になって仕方がないのはあたり前の事である。一人一人違った感覚の子供たちを、一様に同じ遊びに向けていく事は気をつけなくてはなるまい。レストランごっこは結果として楽しい遊びの一例として子供達が見つけたもので、「さあ、みんな

で砂場でケーキを作りましょう」と言っても子供の気持ちの中には、様々な受け止め方がある事を保育者はわきまえる事が必要である。さて、料理がおいしいかどうかは食べてみないとわからない。「先生、食べて、これがスプーンだよ。」実習生として初めて子供たちに取り囲まれての、こんな場面はどきまぎしてしまう。しかし良くしたもので、そんな先生の気持ちを察して「本当は食べれないけれど、食べるまねをしてあげればいいの」と助け船を出してくれる子供がいる。スプーンで掬って口に近づけてモグモグさせて「わぁーおいしいね」の一言で、すっかり子供たちの仲間入りである。後はダイエットを気にせずには旺盛な食欲を発揮すれば子供たちは料理作りに集中没頭することになる。勿論何時でも「おいしいね」では楽しくない。「先生は、もっとしょっぱい方がいいな」等、作り方に関係する返事を返してやったら子供達との一体感には更に現実的なものとなろう。汚れる事で尻込みの子供もいつの間にもやら砂にまみれて遊んでいる姿を目にする事になる。

《卵焼きはね、フライパンを 揺らすとできるんだよ 12例》

- 1.電子レンジで あっためるね・・・はいどうぞ。 ('93-125)
- 2.卵焼きはね、フライパンを 揺らすと できるんだよ。 ('93-45)
- 3.天ぷら できた。(紅葉に砂をつけて) ('93-99)
- 4.お米 といだよ。(砂場遊び) ('93-2)
- 5.先生はい、これ たこ焼き。 ('94-48)
- 6.見てみて、これスパゲッティ。 ('93-78)

7. 見てみて、ラーメンが 出来たよ。 ('92-35)
8. 見て見て、餃子を作ったのに しゅうまいの形に なっちゃった。 ('93-49)
9. 私も、ラーメンと 餃子が できたよ。 *
10. ケーキだよ。ぺたぺた くっついてきて 重たいなー。(泥) ('93-100)
11. クッキーは オープンで 10分 焼きましょう。 ('93-69)
12. このケーキはね、マヨネーズと みかんが 入っているの。 ('93-122)

※幾つかの見立て遊びが展開するようになると、堰を切ったように色々な物が登場してくる。砂場近辺はレストランの厨房に早変わりである。新米のクックさんや板前さんが大わらわで、調理の真っ最中となる。その点、電子レンジは楽なものである。チーンでお待ちどうさん、となる。もっとも、電子レンジは暖めるだけのことで、料理を作ってくれるわけではないから、段ボール箱等を使って電子レンジをそれらしく作ってみたら、レストランごっこへの大きな弾みになるであろう。ある時の遊びで登場したものが次回には遊びのきっかけとして、意味を持つものもある。オープン等も同様であろう。クッキー作りの途中で「クッキーはオープンで10分焼きましょう」と作り方の説明が入るが、オープンは無くとも遊びはそれなりに展開していくものである。しかし、次回オープンに似た形のものを用意してやることができれば、どうだろうか。遊びは毎日のように繰り返され、少し

ばかり何かに変化して続いていくものである。昨日無かったフライパンが今日、砂場にあったら「卵焼きはね、フライパンを 揺らすとできるんだよ」と言って遊んだ昨日とは別の遊びの展開になりそうである。それにしても思いもよらない、色々な料理ができる。ラーメンやスパゲッティの素材は何であろうか、ひもやビニールテープ、それを細く裂いたりして熟れにしろ細くて長い素材が必要であろう。スチロパールの梱包材料で白くて長くてぴったりの素材がある。泥で色をつければラーメンにはぴったりである。葉っぱが泥で包まれた状態はちょうど天ぷらの衣をつけた状態によく似ている。「天ぷらできた」という見立てはそんな処から生まれたものであろう。こうした言葉に保育者は何より敏感であって欲しい。その結果は自発的な遊びの展開、発展として楽しく集中した場面が予想されるからである。

《これがこしょうで、こっちが塩だよ 14例》

1. ごまー。ごま屋さんです。 ('93-65)
2. ごまが 出来たよ。 ('93-132)
3. 砂を 塩にしよう。 ('94-30)
4. 砂を 砂糖にしよう。 ('94-30)
5. 真っ白に なるくらい お粉を かけてね。 ('92-57)
6. この 白い砂は こしょう なんだよ。 ('94-128)

- 7.これ ふりかけにしよう。(砂) ('94-46)
- 8.白砂は ご飯にもなるし、振りかけにも なるんだよ。 ('94-76)
- 9.お砂糖 かけて 食べようよ。 ('93-5)
- 10.仕上げに お砂糖 かけるんだ。 ☆
- 11.これが こしょうで、こっちが 塩だよ。 ('93-132)
- 12.今 振りかけ 掛けるから 待っててね。 ('93-107)
- 13.お花 のせると おいしそうだね。 ('94-27)
- 14.白い砂糖と 黒い砂糖を 混ぜるといいよ。 ('92-44)

※お料理には調味料が欠かせない。塩、砂糖、胡椒、振りかけ等、粒子状の調味料は乾いた白い砂で見立てをする事が出来る。「これがこしょうで、こっちが塩だよ」使う時には、確認をしないと見分けがつかない。「白砂は ご飯にもなるし、振りかけにもなるんだよ」と云う様に場面場面で同じ物が別の物として見立ての対象になる。この白い砂は山作りの場面で、雪や雨に見立てて遊ぶことが出来た。大雑把な、こだわりのない見立てと、選別して特長を見出して、感覚的により本物に近い物を工夫していく遊びがある。「この白い砂はこしょうなんだよ」と云う見立ては、特に選別された砂を指していよう。この選別が遊びのきっかけである。「これがこしょうで、こっちが塩だよ」と云う伝え合いの一言の中にも、この選別の視線が含まれている。選別は何よりも感覚的な行為である。砂糖作りにはふる

いがあったらいい。ふるいの目を通してきれいな砂の山ができる。完全に乾いていれば、白い砂糖になり、幾らか水分が含まれていると黒い砂糖になる。勿論それは胡椒でもあり、空き瓶に入れて目印をつけておく必要がある。瓶の小さな口から、きれいなサラサラな砂を入れるのは、楽しい遊びの一つである。幾つかの瓶が必要である。また調味料によって、それとわかる容器がある。胡椒は大概、蓋を取ったら穴の開いた内蓋がある。使い古しのこんな容器があったら、遊びの集中と楽しさは倍になるであろう。色々な形の小さな容器とふるいは調味料作りと云う、別の遊びを生んでくれそうである。調味料作りの工場遊びに見立てたら良いかもしれない。色々な役割が必要になる。容器も同じ形でたくさん欲しい。保育者の日頃の心掛けで実現出来そうな遊びである。

《白い砂 かけるとクリームケーキになるよ 18例》

- 1.ケーキの上に チョコレート(泥)掛けて あげるね。 ('93-17)
- 2.ほら、ケーキの上に プリンが のっているの。 *
- 3.この白い砂は ケーキの クリームなんだ。 ('92-21)
- 4.白い砂 かけると クリームケーキになるよ。 ('92-124)
- 5.このケーキ お化粧した みたいだね。 ☆
- 6.大きい ケーキができたよ。 ('92-36)

7. 大きな ケーキでしょう。 ('92-7)
8. うさぎさんの 形の ケーキだよ。 ☆
9. 先生見て、もみじケーキ できたよ。食べて。 ('93-99)
10. ホットケーキと ジュースを 作ったの。 ('93-78)
11. 見て、ホットケーキが できたよ。 ('92-3)
12. ほら、ケーキが できたよ。(砂場遊び) ('93-2)
13. 泥の ケーキだ。 ('94-30)
14. イチゴケーキ 作りました。 ('93-18)
15. 見て、チョコレートケーキが できたよ。 ('92-15)
16. このケーキは マロンケーキ。 ('93-83)
17. これ、お父さんの お誕生日の ケーキなの。 *
18. 先生の お誕生日ケーキ 作ってあげる。 ('93-65)

※ケーキは子供たちの大好きな食べ物のひとつであろう。しかも誕生日やクリスマスなどの特別な行事に合わせてごちそうとして買ってもらえることが多い。ケーキは上に色々な物が乗っていて豪華な感じと共に何やら幸せになった気分も出てくる。時々ではなくて忘れたころのケーキは特にそんな感じを伴う物である。そんな背景を持ってのケーキ作りの楽しさを子供たちは砂場でも実現して見せてくれる。「うさぎさんの形のケーキだよ」は、ケーキの形作りの楽しさを特長付けている。色々な形のケーキが出来て来たら楽しいのだが、そんな形のケーキはおかしいなど言葉のやり取りによってパターン化されたり、形作りに色々な展開が得られないことも多い。保育者が留意しなくてはならない場面である。クッキー作りの抜き型など型作りに利用できるものが遊び道具として必要であろう。しかもそれが透明であれば色違いの重ねた層が見えて、遊びの工夫や楽しさにつながる。ここがクッキーとは違ったケーキ作りの楽しさと

いうことになる。それと上に乗せる飾りが工夫の仕処である。「白い砂かけるとクリームケーキになるよ」と言う見立ては既に考察したように砂山を作って白い砂を掛け、雪の山に見立てた遊びの場面とかなり類似した場面である。見立てが食べ物というだけで白い砂を掛けると言う行為そのものは同じである。またこの事は「飾る」と言う感覚的な価値観へ繋がっていくもので「このケーキ、お化粧したみたいだね」と言う見立てが出てくる事でその意識の芽生えを知ることができる。飾るという行為は、こんな場面を始めとして造形活動の随所に見ることができる。その事は飾る事が造形活動の基本的な原点であることを示しているのかも知れない。ここでは美味しいケーキのための飾りと云う事で色々な工夫を凝らす事になる。「ケーキの上にチョコレート(泥)掛けてあげるね」こうした遊びの場面を保育者は「飾る」事のきっかけとして捉えていく事が必要であろう。白い花びらや小石、赤い木の実や発泡スチロール等、飾りに

使える物は捜し方の工夫で無数にある。

《チョコレート工場だよ 16例》

1. あっ、チョコレートだ。集めよう。(水たまりの跡) ('94-85)
2. チョコレートみたい。(水たまりの跡の土の表面) ('94-107)
3. チョコレートケーキだよ。(泥の中に水を入れて) ☆
4. チョコレート作るの。ほらトロトロだよ。 ('94-29)
5. チョコレート工場だよ。 ('93-70)
6. トロトロの チョコレートだよ、おいしそうでしょう。 *
7. 泥を トロトロにすると、チョコレートに なるんだよ。 ('94-76)
8. 砂を入れて、お水を たくさん入れると チョコレートになるよ。 ('93-45)
9. わあー、チョコレートみたい。(ぬれている土を見て) ('93-102)
10. ケーキの上に チョコレート(泥)掛けて あげるね。 ('93-17)
11. チョコレートの上に 葉っぱで 飾ったんだよ。 ('94-118)
12. チョコレートを のせたの。 ('93-83)
13. 先生、このチョコレートケーキ 食べたい? ('94-21)
14. 見て、チョコレートケーキが できたよ。 ('92-15)
15. これ チョコレートみたい。さわってみよう。気持ちいいー。 ('93-100)
16. この白砂、チョコレート味だよ。 ('93-104)

※チョコレートは何を見立てたものであろうか。砂場で見当たる物はない。砂ではこのドロドロした状態は生まれない。これも雨後の園庭での発見による。水捌けの悪い土は幾分か粘土を含んでいるのである。水たまりをかき混ぜて濁した後、その水が蒸発すると、そこには柔くなった粘土が薄く沈殿堆積する。「チョコレートみたい」という発見は見事である。時間をかけて自然に土の粒子が沈殿堆積した結果で、砂が混じっていても泥になった細かい粘土の粒子は砂の上に残ることになる。色もチョコレートの見立てには持ってこいである。これを集めるのにはどうしたら良いだろう。素手で掬うのも良いが、それでは手に付くばかりでなかなか、はかどらない。

空容器で掬う方がたくさん集まるであろう。でもちょっと下はザラザラの砂である。トロトロの泥だけを集めるのはなかなか難しい。砂が混ざっていなければ何のことはない。直に作る事も出来る。乾いた土に水を少し足していくだけで適当なトロトロが出来る。水が多過ぎたら土を足せばいい。お互いに出来具合の比べっこである。あっちでもこっちでも沢山のチョコレートがどんどん出てくる。「チョコレート工場だよ」と云う見立てが出てくる。しかし、水溜りの後から集めたトロトロの泥はきめが細かく見るからにおいしそうである。違いに気付いたり、反対に違いを気にしなかったりして子供の遊びは展開していく事になる。この「チョコレート工場」遊

びでは、作ることそのものが遊びの目標である。よりおいしそうなチョコレートを作るための工夫を思い付いたり、材料や道具をあれこれ替えてみたり、作ることそのものに集中して楽しく遊ぶことができる。出来映えについての評価がそろそろ出てくるようになると、作った物で遊ぶ事がまた新たな遊びの目標になってくる。トロトロのやや流動的な状態は何か別の物に乗せたり移したりという行為につながる。こうした状態そのものに対する興味といってよいであろう。器から器へ流すという繰り返される行為の遊びも成り立つ。し

かし、もっと別の物があったらどうであろうか。「チョコレートの上に 葉っぱで飾ったんだよ」は葉っぱという素材が身近にあって葉っぱで飾ると云う場面の展開が出来たわけである。葉っぱがたくさんあったら、きっとその上に少しずつ乗せていくと云う場面が期待出来よう。クッキーなどとまた別の見立てが生まれたりする。遊びの目標は様々なきっかけでクルクルと変わる。そのきっかけを確かなアンテナで捉える事が保育者の役割であり、子供の遊びを意味付けていく仕事ともなる。

《先生、これはカレーなんだよ 11例》

- 1.この砂で 先生に カレーを 作ってあげる。 ('94-101)
- 2.先生、これは カレーなんだよ。 ('94-80)
- 3.先生、カレー 作ったよ、見て。 ('94-28)
- 4.はい できましたー。カレーです。食べて下さーい。(泥遊び) *
- 5.これ カレーの 素だよ。 ('93-46) / ('93-98)
- 6.カレーをおいしく作るにはね、この特製のりんごジュースを入れるといいんだよ。
- 7.これは シチューだからね。 ('93-80)
- 8.この泥水のスープに 石のじゃがいもを入れると もっとおいしくなるよ。 ('93-49)
- 9.先生、スープが できたよ、食べて。 ('93-39)
- 10.はい、おしるこだよ。どうぞ 召し上がれ。 ('93-47)
- 11.こんなに ドロドロしているよ。 ('94-14)

※チョコレート、カレー、シチュー、スープは共に砂と水の混ざったトロトロ状態の見立てである。土に水を入れてかき混ぜて出来る泥の状態を見立てた物であるが、出来上がったカレー状態の見立てばかりではなく、遊びとしては、その作り方の工夫をも含めたものになっている。チョコレート以外は具が入っているのでその状態の出来上がりについては、特に善し悪しはない。むしろ美味しいカレー

のためには、あれこれと見立てをしてドロドロの中に投げこむ事になる。ジャガイモの代わりは小石であろうか、人参はどうしよう。赤い小石のありかを知っていたりする。丸い小石、角ばった小石、レンガのかけら、小さな木切れ、葉っぱ、木の実、草の実。あちこちから捜してきたり、見つけたり、思いついたり、さまざまな物がカレー作りには役立つ。カレー作りが広がりを持った活動になるかど

うかは、この具の調達にある。「特製のりんごジュースを入れるといいんだよ」は、お母さんのカレー作りのお手伝いで聞き知ったことかもしれない。「石のじゃがいもを入れるとちょっとおいしくなるよ」は、この遊びを楽しんでいく上で見逃す事の出来ない一言であろう。スープやカレーには色々な呼び名がある。これが遊びの発展のきっかけになる。そのためには先生の助言が必要でもある。「これは、何カレーですか」の一言で良い。入れた物によってカレーに名前を付ける事が出来る。勿論、テレビのコマーシャルでしばしば登場するカレーが人気の的であろう。そのうちに違うカレーが登場する。それは具として入れていく物の違いでもある。シーフードカレーなどはどうであろうか。貝やかに、えびやワカメなどに見立てることが出来る物は砂場の近辺にいっぱいであろう。具を捜したり色々に見立てる工夫が遊びになり、遊びの集中と変化が期待できる。隣のグループは小さな石をコーンに見立ててコーンスープ作りである。小さな石も三個や四個ではだめだ。皆同じ大

きさで10個20個と集めなくてはならない。小石集めが今は遊びの目標である。誰かがいっぱい小石のある所に気付く。駆け寄ってみるが少し大きいようである。それならじゃがいもにして、入れたらどうだろう。材料が集まったら今度はお料理である。鍋や釜、お玉、ボール、箸、スプーン、フォーク、お皿、コップ等、何組かが必要である。調理台も欲しい。食卓のテーブルもあつたらいい。腰かけも必要だ。お客さんは誰にしよう。「先生、スープができたよ、食べて」まずは先生が味見役となる。こんな場面の展開が予想できそうであるが、小道具がここでも遊びの広がりには欠かせない。使い古した鍋、釜、フライパン等お勝手用品が砂場の近くに用意できていれば好都合である。コップでお水も欲しい。レストランらしい机もあつたらいい。レストランごっこは砂場の近くでも出来るのである。飲み物、食べ物、色々なメニューができる。室内のままごとセットよりダイナミックで現実的な遊びの展開になるであろう。そのためには砂場の環境整備が何よりも大切であろう。

《コーヒー牛乳みたい、飲みたいな 12例》

1. コーヒー牛乳だよ。(砂場遊び) ('93-2)
2. こっちが 牛乳(ただの水)。 ('93-90)
3. ココアだよ、飲んで。 ('93-47)
4. あっ、コーヒー こぼしちゃった。大変。 *
5. 先生 コーヒー 作ったから 飲んで。 ('94-81)
6. コーヒー牛乳みたい。(泥水を見て) ('94-107)
7. コーヒー牛乳みたい。飲みたいな。 ('94-130)
8. これコーヒー たくさん 作っているの。 ('92-30)
9. はい ジュースどうぞ。飲んだのは ここに置いてね。 ('94-82)
10. おいしいジュース 作っているんだ。 ('94-14)
11. 泡の 生クリーム あげるね。 ('93-80)

12. ビールだ。ビールの泡だ。(砂場に水を流して) ('92-47)

※チョコレートやカレー作りは砂や土が見立ての対象であった。そのための土を捜したり、水の加減を調節したりが遊びの始まりであった。コーヒーの見立てはそんな遊びと同時に生まれたものであろう。「砂を入れて、お水をたくさん入れるとチョコレートになるよ」と水の量が多過ぎたら、幼児の視線は濁った水に向いてしまう。この濁った水がコーヒーと云うわけである。あるいは「コーヒー牛乳みたい」と云う発想になるわけである。ここでは、色々な飲み物の見立てごっこが始まる事となる。それは色合いの違いによって成り立つ見立てでもある。コーヒー、コーヒー牛乳(ただの水を牛乳と見立てるのも面白い)、ココア、麦茶、烏龍茶なども出てきそうである。勿論、見立てただけでは遊びは続かない。「先生 コーヒー作ったから飲んで」と云う事でいつものように先生が味見役とならなくてはならない。「おいしいね、でも、もうちょっと甘い方が先生は好きだな」等と言葉を返して

やったらどうであろうか。「飲みたいな」と云う人が出てきたり、色々な注文がいたら作る方ではそれなりの工夫をしなくてはならない。子供たちの好きな飲み物はジュースである。当然の事ながら、ジュース作りも始まる。こちらの方はどうしてもカラフルな色が欲しい。粉絵の具があれば、たくさんの色水ができる。オレンジ、レモン、いちご、りんご、ぶどう、メロン等、見立てる事(名前をつける事)の方が今度は忙しくなる。しかもきれいなコップにでも注いだら本当に飲んでしまいそうである。そんな際の注意も、ぼろっと出てくるからキリキリ心配する事はない。「はい ジュースどうぞ。飲んだのはここに流してね」と云うように口の中に流し込むのではなく、バケツが決められた穴にでも入れれば、おいしく飲んだ事になる。勿論、おいしく飲むゴクゴクとか、ガブガブとか、ツーとかの擬音や身振りは必要である。

《こんな 固い おだんごができた 10例》

- 1.あそこに おだんご 隠してあるんだよ。 ('93-21)
- 2.おむすびと おだんご 作っちゃた。 ('93-116)
- 3.こうやると お団子 出来るよ。 ('92-54)
- 4.粉は 最後に かけるんだよ。 ('93-113)
- 5.この砂だんご カチカチ 固くて 卵みたい。 ('92-97)
- 6.こんな 固い おだんごができた。 ('93-14, 61)
- 7.小さい 団子は こわれないんだよ。 ('92-78)
- 8.このお団子ね、ピンク色で いちご味なんだよ。 ('93-72)
- 9.先生、おだんごできたよ。食べて。 ('93-26)
- 10.先生、おにぎり 作ったから 食べに来てね。 ('92-79)

※おだんごとおむすびとの素材の違いは何処にあるのだろう。砂はどんなに丸めても崩れやすい塊である。特に水分が砂と砂の粒子をつながなくなったら、もろいものである。かと云って水を掛けたら同様に崩れてしまう。「こんな固い、おだんごができた。」と云う報告には素材の違いがきつとある筈である。「この砂だんご、カチカチ固くて、卵みたい。」と云う言葉で既に様子が知れる。砂場の砂ではなくて水たまりで出来た泥がその鍵を握っている。砂だけではないのである。粘土質の泥を含んでいて固い黒光りのする卵の様なおだんごが出来るのである。泥の状態も乾いた土を掛けることによって、適当な固めやすい状態に加減することが出来る。小さな両の手でしっかり固めて、コロコロ転がす事が出来なくてはだめである。この時に更に乾いた白い土を掛ける。「粉は最後にかけるんだよ。」粉

は白い土で、粘土質の乾いた成分である。水分を吸収して固く締める役割をする事になる。砂だんごと泥だんごの違いは形や大きさに、はっきりと出てくる。子供にとっては砂と泥の違いはどろどろと言う容態の表現も含まれているので明確ではない。しかし、砂と泥の違いは素材の違いとして保育者は理解している必要がある。その違いによって遊びの工夫が生まれるからである。この固い玉作りの事を「しんとん作り」と言う報告があり「芯とん作り」と書き換えると少しばかりヒントになりそうであるが、不詳である。おだんごとおむすびの素材の違いを考察してきたが現実的な食生活でも、おだんごは粉で作るもの、おにぎりは粒で作るものであるとするならば素材の形状としては砂場と変わらないわけで、見立て活動の妙に感嘆する事になる。

(未了 次号へ続く)